

微生物検査の標準化に向けた取り組み ～技師会を通じた標準化事業～

◎河内 誠¹⁾JA 愛知厚生連江南厚生病院 診療協同部臨床検査室¹⁾

標準化とは、その時点で最も優れた方法を定め、誰でもその方法に沿って作業や業務を行うことができるようにすることを指す。つまり標準化によって「いつでも」「どこでも」「誰でも」バラつきの少ない結果報告を行うことができる。加えて昨今の医療情勢から、そこに経済性と効率性も求められている。しかし現状では、使用培地や釣菌基準に代表される用手法的なバラつきは大きく、その是正は重要な課題である。公益社団法人愛知県臨床検査技師会（以下：愛臨技）は、3,600名を超える国内有数の会員数を誇る臨床検査技師会である。今回、愛臨技微生物検査研究班（以下：当班）として取り組んできた標準化事業について、その三本柱を紹介する。

1) 知識の標準化

質量分析に代表される近年の技術革新、コロナ禍による遺伝子検査の普及ならびに疫学の変化など、微生物検査を取り巻く環境は常に変化している。コロナ禍で様々なwebセミナーが行われたことは、専門的知識の取得に大きなプラスとなった。しかし基礎的知識の取得に適した発信は決して多いとは言えない状況であった。そこで当班は年4回の研究会をいち早くwebセミナーに移行し、県下のみならず全国へ情報を発信した。研究会の内容は基礎的知識の底上げとし、初級者から中級者までをメインターゲットとした。2022年度からは「頻出菌を学びなおす」をテーマに掲げ、1つの菌について細菌学（同定感受性、耐性菌など）と臨床（感染症、治療など）の両側面から情報提供を行った。班員の熱意とたゆまぬ努力により、全国に誇れる内容になったと自負している。現在は現地開催に回帰し、ディスカッションを行い参加者のリアルな意見を吸い上げることで、標準化の妨げとなっている事象の洗い出しに役立っている。加えて年1回の基礎講座では、初級者をメインターゲットとし、微生物検査の流れに沿った実習を行っている。検査結果の解釈や報告方法の習得に役立つと、毎年好評を得ている。

2) 技術の標準化

愛臨技サーベイでは、県下における施設間差是正を目的とし、精度管理調査から各施設の改善までをその事業の範疇としている。日臨技サーベイと同様の内容（菌株による同定感受性、フォト）に加え、愛臨技サーベイ独自の設問を2つ加えている。1つ目は感染症法の届出要否についてであり、評価対象外であったものを2017年度から評価対象項目とした。劇症型溶血性レンサ球菌感染症や百日咳が全数届出疾患であることを回答できない施設が多かったため、その後の周知へと繋げた。2つ目は釣菌技術について2022年度から設問を新設、評価対象項目とした。便や喀痰など常在菌の混じった検体から起炎菌を釣菌する設問であり、これをもって一般細菌検査の全工程を愛臨技サーベイで網羅することができた。また結果が芳しくない施設を招聘し結果検討会を行うことで、各施設に寄り添ったアフターケアを行っている。

3) マニュアルの標準化

2018年の医療法改正やISO15189の広がりにより、各施設で微生物検査のマニュアルが整備されつつある。しかし用手法的な作業が大半を占める微生物検査の性質上、検査法における各施設・技師の裁量は大きい。また成書や学会が提示する検査法も一部分に留まり、微生物検査の全工程を網羅しているとは言えない。愛知県臨床検査標準化協議会（以下：AiCCLS）では、各分野における標準手順書を作成しており、「日常微生物検査における標準手順書」の初版を2006年に発刊した。現在、内容を大幅に見直した第2版の発刊作業が大詰めを迎えている。発刊した暁には、一人でも多くの方の知識・手技習得の一助となり、また検査フローを見直す際にご活用いただければ幸いである。

患者背景によって起炎菌が異なる点、施設によって自動機器の普及状況が様々である点、加えて各施設の歴史的背景からも、標準化の道は長く険しいが、医療機関・検査センター・学会ならびに技師会が一体となり、より高い水準での標準化を目指していきたい。

TEL 0587-51-3333 内線 2329